

グレアム・グリーンの小説について (二)

宮 井 敏

戦後に書かれたグリーンの小説の中で、重要なものの一つに、「事件の核心」*The Heart of the Matter* (1948) がある。主題は前に述べた二作からは一步突き進めた形の、肉体的現実と神の認識との対立であり相剋である。人間が自らの内なる不安定な肉体の愛を昇華して、対人関係に於てそれを純粹なものとする程—つまり特定の対象を超えて抽象化されてしまう程—それは神の愛に近づく一方、つながられた肉体との亀裂が、彼を自己否定としての自殺と言う形に追い詰めてしまうと言う論理の悪循環を、一人の本当の意味での良心的なカソリック教徒の自殺と言う形で、作者は証明しようと言うのである。

スコウビイは西部アフリカの英領植民地での勤続十五年の老練で誠実な警官である。新任の官吏は誰しも十八カ月目にやつて来る帰国休暇には、神経衰弱で干枯びてしまつて本国へ送還される様な気候の悪い土地で、彼は昇任も転勤も希望せず、ただ何となく漠然と暮してきた。暑熱の為にいらいらして怒りつづくなつた英系官吏、狡猾で油断も隙もならない

シリア人達、無知で魯鈍な原住民、—そういつた連中が、買収、恐喝、密輸、陰謀など、およそありとあらゆる不正手段を弄して、腐肉をあさる禿鷹の様だ、利権をめぐつてうごめいてゐる中で、彼が *Scobie the Just* と呼ばれてきたのは、必ずしも勤務に忠実であらうとした訳ではなく、殆んど条件反射の様に一つ一つの無限の現象的な事件の連続を無意識的にさばいてきたにすぎない。

.....he felt himself free from serious sin, but it had never occurred to him that his life was important, one way or other. He didn't drink, he didn't fornicate, he didn't ever lie, but he never regarded this absence of sin as virtue. (*The Heart of the Matter*: Heinemann, Uniform Edition, p. 130)

罪を犯す事もなかつたと言うのは、実はただ単に機会がなかつたからだと彼は考える。生活全体としては、だから忽論「否定」であるが今日一日はすくなくとも「肯定」しようと言う彼の生活態度は、したがつてあくまでも受身の形を取つて

おり、決して積極的に「生き」ているのではない。疲れはてて

浪費されて消えてしまつた十五年の歳月を妻の上に見出しては、ただ茫然としてゐるだけの事であつた。妻、それは彼にとつてはもはや、何の感動をも呼び醒さない殆ど完全に別種の存在であつた。今では彼は彼女をどんな形に於いても必要としなかつた。彼にしてみれば家庭とは無意味なものをとり去つた最少限の確乎とした親しみのある不変のものを意味したのだから、彼女にとつては、それは反対に蓄積を意味してゐた。且ての文学少女、美術を語り詩を読み、おしゃべりで snobism のあらゆる特徴をそなえ、しかも醜かつた。彼女が彼の本質とは全く何の関係もない一つの個性を想像してそれを彼に押しつけようとする限り、彼は家庭の中にあつて孤独であつた。家に居る間中、彼の名を呼びたてる妻をさけて、スコウビイは、錆びた手錠と安物の官給家具しかないガラシとした役所の自室や、妻の配慮のおよばない、自宅の物置のような浴室のみ、自分自身を取戻したような気持ちになるのであつた。丁度 Family Reunion の、「あまり夫婦のものがいとも一緒にゐるのは決してよい事ではなく、男には一人静かに、煙草でものめる、妻のついてこられない場所があるのだ」と言う、素朴なしかしながら現代の夫婦生活の盲点をついてゐるダウニングの言葉を思わせる状態である。

(T. S. Eliot: *Family Reunion*, F. & F. p. 41) として又、ルイズの夫に対する態度は、Cocktail Party における、

ラヴィニアのエドワードに対するそれである。

You're still trying to invent a personality for me,
which will only keep me away from myself.

(T. S. Eliot: *Cocktail Party*, F. & F. p. 87)

こうした、一見平凡には見えるが実は大きな危機をはらんだ夫婦関係―それは単にスコウビイ自身の disease ではなくて、現代文明と言う巨大な機構全体を犯してゐる一つの病患であり only pieces of total situation なのである。いつかは何等かの形で残酷な解決をせざるであらうような状態である。これを、崩壊しゆく社会制度の中の一つの単位としてみる時、スコウビイ夫婦の situation は全人類的条件の下にあると言えよう―こうした状態の中にあつて、彼の妻ルイズへの愛はもはやどんな意味からも肉体の愛ではありえず、pity とそして responsibility だけであり、従つてそれは妻と一言特定の対象を離れてどの様な方向にも向けられうる抽象化された愛であつた。スコウビイは、彼女をこの植民地の埠頭で迎えてからの十五年の経験と言うものが、ルイズの且ては世間知らずでのんびりと物柔かに笑つていた表情をつくりかえてしまつたのを見る時、彼女のメラニコリや不満や失望の潮に向つて King Canute がしたように力なく呼びかけるのであつた。彼が彼女を愛しようと思ひ、あわれみと責任感とが情熱の激しさを高まるのは、彼女がみにくく見えるこんな時であつた。彼が退職する署長から後任として推薦されるの

を辞退した夜、屈辱と怒りで半病人になつてゐるルイズをなだめてクラブへ連れだした彼は、同僚やその夫人連のあわれむような微笑に對して、部下の連中が“Literary Louise”とさげすんでゐるのに對して、挑戦するかのやうに大げさに妻をいたわり、故意に模範的な夫として振舞うのであつた。

What right have you, he longed to exclaim, to criticize her? This is my doing. This is what I've made of her. She wasn't always like this.

(*Ibid.*, p. 29)

それはあまりにも巨大な責任感であつた。彼は自分にはまだわかつていない妻の將來の不幸に對してすら、不思議な予告的な罪の意識のためにいつも責任を感じてゐたのだつた。こうした彼にどうして jealousy の感情が起りえよう。クラブで紹介された新任の会計係、実は英本国から派遣された戦時諜報員、ウィルソンが、或日突然、“I kissed her that night……”と告白して、“Oh, it's the colonial sports.”と軽くあしらつてしまふのである。

このあわれみの感じが中立国船舶の検査の際、船長室から発見された私信を報告しないで不問に付してしまふ。戦時刑法によればそれはあきらかに違反であり坑命であつた。多くの腐敗した警官は金のために節をまけたのだが、彼は感傷のために節をまけた。「美しいものや成功するものに對してはあわれみのない戦を挑む事が出来る。だが魅力のない敵を

苦しめる時は、胸に重石のようなものがのしかかる」と言う一つの pity—sentiment のために。がとにかく、罪は罪だつた。利他的な抽象の愛がその対象を抜けつつも、実はその事自体矛盾をはらんで、歩一步スコウビイ自身の存在をむしばんでゆくのである。「スコウビイには人生が無限に長いものようにおもわれた。人間の試煉と言うものがもつと少しの年月で行われ得ないものであろうか？ 七才で最初の major sin を犯し、十で愛が憎しみのために破滅し、十五才の死の床で贖罪の機会をつかむ事が出来ないものであろうか」。(*Ibid.*, p. 56)

生きる事への悲しい倦怠感である。一方妻への責任感が彼を惨めな気持ちに追込んでしまふ、気分転換のために、ルイズは南アフリカへ転地したいと言ふのであるが、スコウビイの俸給では到底、船賃を払う事は出来ず、忽論銀行にも預金はない。にもかかわらず、「彼女の口の両隅の所に残つていて機会さえあれば顔一杯にひろがるうとしてゐる」みじめなルイズの表情を見る時、彼には本當の事を説明する事がどうしても出来ない。妻の失望落胆を見るよりは嘘をついた方がまだしもましである。真実、そんなものは人間にとつて何の価値もないものであつた。それは数学者や哲学者の追求する一つの象徴にすぎない。人間関係においては、親切と嘘の方が無数の真理よりもはるかに価値のあるものだ……。遂に彼は一つの決心をする。この上は誰かに金を借りる外はない。

それほど親しい友人をもたぬ彼がふと思ひあたつたのは何時か車で家へおくり届けてやつたシリア人の闇商人の事である。彼等から金を借りる事はそれ自体警官としての彼の破滅を意味した。狡猾で悪辣な彼等はただでさえ買収の機会をねらつてゐる以上、有利な条件で彼の申込を容れるではあるうが、その時かぎりもはや Scobie the Just と言う名は過去のものとなるであらう。だが、ルイズを幸福にするのは自分の責任だと言う怖ろしい誓いをひそかに立てた以上、彼は自分の行動の責任を取る心算であつた。そのため行為が自分をどんな所に追いやるかは臆気ながら解つては居たけれどもうづれにせよ彼はやらねばならなかつた。そうした不可能な目的を決めてそれを追求しようとする人間は、その代償として絶望的な行為に奔らざるをえない。そしてそのような行為は許しがたい罪だと言われている。「だがそれは墮落した人間や邪悪な人間は犯す事のない罪である。そう言つた人間は常に（絶望的な行為を）実現する希望を抱いている。絶対的な失敗である」と知る事はそのような人間にはありえない。善意の人間のみが常に心の中で、絶望から来る墮獄 damnation の可能性をもつてゐるのだ」。(ibid., p. 67)

ロマ書第六章第十六節に、

「なんぢら身を献げ候となりて誰に従うともその従ふ所の僕たるを知らざるか。或は罪の僕とならば死におよび、或は順の僕とならば義におよばん」。

とある。人は二人の主に仕ふる事能はぬわけであり、且我々が人間である以上、我々のなす事は（倫理的な意味での）善悪何れかであるに相違ないし、又逆に言えば、善や悪をなす限り我々は人間である。そこでエリオットが言うように、「少くとも、我々が生きてゐるからには、何もしないよりは悪をした方がよい。人間の栄光とは救済 salvation を受ける可能性であると言う事が真であると同時に、その栄光は墮獄 damnation の罰をうける可能性である事もまた真である。政治家から泥棒にいたるまで大抵の罪を犯す連中について言うる最も悪い事は、これらの連中が墮獄の罰をうけるに足る程の人間でない」(T. S. Eliot: *Baudelaire, Selected Essays*, F. & F. p. 103) 訳であつて、スコウビイの場合 damnation は明らかに自ら意識してゐたものであり、彼にとりついて離れようともしない責任の重みと、それを果しえない無力の感じとの亀裂の間にあつて罪を犯す可能性は眼前に迄きているわけであつた。スコウビイがここに到つてはじめて受身の立場を捨て、積極的に生を「生き」始めた時、道は一直線に地獄を目指してゐたのである。彼は罪を犯すに足るだけの人間であつた。遂に彼は危険を犯してシリア人のユ

ーサフから妻の南阿行の旅費二〇〇ポンドを借りける。

Friday. Fine day. Walk in the morning. Y. called in the evening. His pen was powerless to convey the importance of any entry: Only he himself, if

he had cared to read back, could have seen in the last phrase but one enormous breach *pity* had blasted through his integrity. (*ibid.*, p. 130)

一つの責任を逃れるとすぐ次の責任をひきうけなければならなくなると言うのは彼の悲しい宿命でもあつたのである。スコウビイは妻を旅立たせた後、ヴィンシー政府フランヌ領からの難民を收容するために出張し、そこで枢軸国側の潜水艦に撃沈されて四十日間海上を漂流していた人達を保護する事になる。今度の責任は彼がいろんな人達とわかちあつてゐる責任ではあつたが、だからと言つてその点何の慰めになるわけでもなかつた。誰にも説明出来ない不安な気持や、気になつて仕方がない患者達の姿や、責任感とあわれみの感じからくる怖ろしい無能力の感じに彼は苦しむのであつた。「このように不幸にみちた世界で幸福を求めるのは何と言ふ不合理な事だろう」と彼は考える。「幸福な人間と言ふものが本当にあるならば教えてほしいものだ。私はすぐにその人間には、*egotism* か、*selfishness* か、*邪心*か、それとも絶對の無知かがある事を示して見せよう」。

Outside the rest house he stopped again. The lights inside would have given an extraordinary impression of peace if one hadn't known, just as the stars on this clear night gave also an impression of remoteness, security, freedom. If one knew, he wondered, the

facts, would one have to feel *pity* even for the planets? if one reached what they called *THE HEART OF THE MATTER?* (*ibid.*, p. 141)

彼は全面的な覆敗の世界にあつて、一見清廉な人間であるように見えていたのであるが、実は彼が自分の殆ど *voyacious* な迄のあわれみの感じのためには、教会や國家の最も重要な法をさえいつでも破つてみせる人間なのであつた。スコウビイの性格はグリーンが作りだしたあの一連の類型的なタイプ—罪の意識と劣等感にせめさいなまれる *sinners*—の一つであるが、彼がそうした先輩達、「権力と栄光」の *whisky priest*、「フライイトン・ロック」(邦訳名不良少年)の愚連隊ビンキイなどよりも皮膚が一枚少いように見えてゐて實際は一枚よけいにもつてゐる—Henry Scobie, who seems to have one skin less than his tortured predecessors, actually has one more. (*Time*, 248 Aug. 9)

—と言ふのはこの点である。

そしてこの「あわれみ」の感じの故に次々と引起される事件は、重くるしく強情に進行してスコウビイをぼろぼろしてゆく。彼はすでに國家の法を二つながら犯した。あとに続くものは彼の先輩達が示したように、姦通であり瀆聖であり、殺人であり、そして最後には自殺である。收容された漂流者達の中にレン・ロルトが居た。結婚して四カ月目に夫を喪ひ

本国へ帰る途中遭難した十九才の牧師の娘である。結婚指環が子供が正装した時のようにぎこちなく指にはまつており、持物と言つてはスタンブ・アルバムだけしかなくかつた。スコウビイは始め彼女が担架で運ばれてゆくのを見た時、その運命に深い同情をよせるのであるが、その後彼女が退院して彼の宿舎の近所に移り住んでから親しくなり、僻地にあつて身寄りもなく大人のエテイケットも知らずにいる小娘のような彼女の保護者にならうとするのである。彼等二人の間に、死んだ良人、生きてゐる妻、牧師である父、警官としての職務などと云う差違がある以上彼等は友達以外には決してなりえない友達であり、おたがいに何を話しあえばよいかと氣を揉む必要がないために、二人共限りない安全感をもつのであつただが利巧なものや狡猾なものや勢力のあるものだけが盲くやる事の出来るような戦争の最中に、何もわかつていない頼りない彼女を見る時、責任感が潮のように自分を岸の方へ運んでゆくのを彼は感じるのであつた。彼女は海から救い上げられたが、捕える価値のない魚であつたかのように又海に投げ返されるのだと考える時、彼女が五里霧中でまよつてゐるこの世で道しるべしてやる事が出来ない時がやがて来るに違いないと考える時、彼は悲哀と愛情と無限の憐みをもつて彼女を見守るのだつた。二人の間の安全感などは実は、友情、信頼、あわれみと言ふ言葉において働くスコウビイの「敵」のカムフラージュにすぎなかつた。ヘレンを追いまわす空軍

将校から彼女を守らうとして、雨の激しく降る夜、二人は罪を犯してしまふ。彼はルイズの幸福を守らうと決心していた筈だつた。今や彼はそれと完全に矛盾するもう一つの責任を引受けてしまつたのである。身動きならぬ状態に自らを陥し込んだ彼にはもはや如何なる形においてすら救いはないのだと考える。神すらもが何の力も持つてゐなかつた。懺悔する事は自らの罪をいよいよ深めるだけの事であつた。悲劇はテンポを早め、破滅は刻々に迫つてくる。一つの罪が今一つの罪を惹きおこし、次々におこる罪の連続が執拗にそして確實に彼を追い詰めてゆく。卑法だと言われてヘレンにとゞけた手紙を闇商人のユーセフに押えられ、交換条件として密輸に協力させられてしまふ。罪のスケールは加速度的に大きくなつてゆく。そこへヘレンとの噂を知つた妻のルイズが南アフリカの僻地から帰つてくる。眞実を告げる事も出来ぬままに強いられて教会にゆき、懺悔をすませた罪なき信者をよそおつて聖餐を拝受する事になる。瀆聖の罪である。一方、人を信じられなくなつた彼は十五年間彼に忠実であつたボーイが彼のさまざま疑わしい行為をあまりに知りすぎていると言ふ事からうとましくなり、ふとその氣持をユーセフに洩した事から、ボーイはシリア人の手で片附けられてしまふ。間接ながら殺人の罪である。今や彼のとるべき道は自殺しかなかつた。死者には何の追求の手ものびる筈はない。問題はそれが自然死の形をとらなければならぬと言ふ事であつた。

後に残されたものにとつて、彼の死が一つの自然な解決として役立つ風でなければならぬ。この場合、自然死の形をよそおつた自殺が彼女等にとつて最も説得力のある解決方法だと考えた彼は—どのみち解決とは多少共残酷なものであるが—病気の症状をいつわつて睡眠薬を手に入れ、周到な用意のもとに致死量に達するまでそれを貯え、一どきに服用する事によつて、すべての事が実は何でもなかつたかのように、或る晩静かに死んでしまうのである。

スコウビイの愛は年令と氣候の故に如何なる意味からも欲情的なものではありえず、純粹に抽象的なあわれみと言う感情に置きかえられている。彼は経験によつて情熱は消えてゆき、愛はなくなるが、あわれみの心は常にこの事を知つていた。何ものもそのあわれみの感じを減少させる事は出来なかつた。生と言う条件がそれを養ひ育てたからであつた。そしてこのあわれみと言う言葉は愛と同じく軽く用いられているが、實際はそれを本当に経験する人の殆んどない位の怖しい見境のつかぬ情熱なのである。それは一つの名前、一枚の写真、思い出のある匂いでさえ人の心をとかしてしまふ事が出来るのである。少くともスコウビイにとつては、それはそうだつた。しかも勤続十五年の警官として、弱者の保護と義務感に身についた第二の天性のようなものであつた。美しい者や成功した者には彼の感情は動かされなかつたけれども日常生活からわざわざ外れてまで追い求めようとは誰も思わ

ないような顔や、ひそやかな盗み見を決して受ける事のないような顔は彼の心を動かすのであつた。あわれみと責任感、それは *Time* が指摘しているように、半言の利己心か、おどろくべき精神的自負であるかもしれない。しかしスコウビイ自身にとつてはそれは動かし難い現実であり、死か無関心かと言う敗北の瞬間が来るまで、局部的な戦術的勝利があるにすぎぬ人間の地上の愛に較べれば、その抽象化された性質から来る普遍性と肉体を超越した純粹な自己犠牲とを考えれば、それは神の愛と同化しうるものではなからうか。そしてその故にまき起される事件がたとえ罪であつたとしても、スコウビイは(断じて聖人ではなからうけれども)現実には、*likable sinner* やあり、*pardonable sinner* であつたと言えよう。

こうして悪の裏小路にゆき暮れた魂の苦惱はスコウビイの行為の上に見事に表現されているのであるが、更にグリーンが *entertainment* と自ら呼んでいる一連の作品の中でしばしば成功を収めたスリラー的な手法と構成がそれを緊迫した空気の中で隙のないものとしており、行為そのものゝ異常さを感じさせない。映画のカメラの眼が向けられたように何気なく登場してきた主人公は、制服を着ていると言う事を除いては、一見誠にありきたりの、そのあたりの街角で出会いそうな人物であり、偶然の機会に彼が副署長から署長へ昇任しなかつたと言う事も実に何でもない事である。所がその事の

ために妻は南アメリカにゆく事となり、その旅費のために汚職を敢てし、妻が居なかつたためにヘレン・ロルトと間違ひを犯し、ロルトの事から脅迫されて密輸に関係し、そうした事を妻に打ち明けかねて偽つて聖餐を受け、古馴染みのボーイを失い、あけくの果て死を決したところへ署長へ昇任の報がもたらされると言う訳である。この間にあつていけば翻弄されているスコウビイの魂は、忽論こうした一連のわづか六カ月の間の偶発的な連鎖事件にただ盲従しているわけではない。その一つ一つに対して解決に全力をあげ、破壊の予感には油汗を流して抵抗を感じるのであるが、漠然たる罪の意識が根柢にある以上、抵抗は微弱であり、努力はむなしきものでしかない。これらの事件は、人がその実感を朴度するのを許されない、スコウビイにとつての心理的必然だつたのである。モリーアック論の中でグリーンは、モリーアックの作中の人物のさまざまな行為は、彼等が神にせよ悪魔にせよ大した重要性をもつていないし、作中の事件は人物を change するためではなくして、reveal するために比類なき精密さで除々に示して見せるためにあるのだと言つてゐる。

We are saved or damned by our thought, not by our action. (G. Greene: *The Lost Childhood and other Essays, Francois Mauriac, Eyre & Spotswood, p. 72*)

重要な事は行為そのものの偶発性や必然的帰結ではなくして

精神であり魂であると言うのである。従つて我々は、この西アメリカの植民地でおこつた事件の異常さや、合理性や蓋然性のあるなしをあげつらふ必要は少しもないわけであつて、*“by trying to clothe the theological speculations in flesh and blood, it produces absurdities.”* と言ひ批難はあたつてゐない。問題はスコウビイの苦悩の本質が一つの信仰を抱いて神に献身しようとする人間の心の中なる普遍的な矛盾を示す事にあるからである。更には又、こうした矛盾は例えば、善と悪、神と人間、愛とにくしみ、或は又、「半盲の利己心」と自己犠牲と言ひ形をとつて、一口で言へば、*“Terror of Life”* と言ひ人間の免れがたい宿命的不幸を全人類的条件の下に示してみせようと言ひのであつて、必ずしも西アメリカのカソリック教徒スコウビイのみに個有の問題ではない。事実、この小説に現れる憐愍や不安や疑惑、罪の意識、神への憧憬と言つた人間的感情は誰しもが抱いてゐる漠然たる道德意識をおそろ普遍的な苦悩であるわけである。

グリーンがスコウビイと言ひ性格を通して執拗に追求して来たこの「生きる事への恐怖」と言ひ *obsession* は、彼のその他の作品を見てもしばしば「逃亡」と言ひ形をとつて現わされてゐる。社会に於てその社会の構造乃至型が人間の感動の型を決定するのだと言ひ事が本当だとすれば、こうした混乱と無秩序の社会に於てはもはや革命意識か逃亡意識か人間を感動させる事はないと言ひ事も言ひうるわけであつて

グリーンが神との対立における人間の存在の危機感を「逃亡者とその追跡」と言う形に於て日常的現実の中で示して来たと言うのも、考えて見れば彼が現実の社会構造の断層に直面して、それを如何に処して行くべきかと言つた具体的方法よりも、それを人間心理の領域に還元する事によつてまづ第一に人間自身の生くべき生を考え、一つ一つの時代の現象的な危機をくりぬける事よりも更に一步立ち入つた人間の存在自体の危機を考えてきた訳である。現実の混乱とむきあつてもはや人間的次元に於ては絶対的な実在をとらえる事が出来ないと言うヒュームの絶望から発した、人間のむなしさを見詰めようと言う「生の悲劇的意義」の認識は、グリーンに到つて、人間が本来善であるか悪であるか、又はそのいづれかであると云う事にとどまらず、一体何が evil であり、何が virtue であるのか、確実にわからないまゝに、實際日常生活の瞬間において、不完全きまざる本質を背負いながらも、現実の利害を調整し、行動し、その責任を引きうけてゆかねばならぬと云う形をそれはとつている。そうした行為の瞬間によし「誠実の瞬間」が時に閃くにせよ、所詮人生とはこのような瞬間のつらなりであり、本来悲劇的な苦闘である。スコウビイに象徴された生の悲劇的意義はつまりは「彼が自分の軌道を外したと言う事実のみにあるのではなく、且て彼がその軌道の何たるかを知らなかつた」(Henry Reed: *Novel Since* 1939, Longan Green Co.) と言う点にあるのである。

人間の愛とは所詮肉体につながれた不安定なものでしかない。それをあわれみや責任感に変化させて永続性をもたせようとする時、それは特定の対象をこえて抽象的な愛に變りはするが、一方人間は依然として肉体にむすびつけられているために、もしその抽象の愛が肉体に行為としての証明を求めらば人間は矛盾の中に絶望し自らをほろぼさざるをえない。しかもその肉体は神の愛をうけ入れる約束としてのものであつた筈だと言う論理の悪循環がここにある。一方には人間的な情慾をこえる掟と、人間世界を超越的に支配する神の概念とがあり、他方には「とにかく生きていく」人間の不安定な残念な存在がある、と言う論理と実存の対置である。この事は人間存在の底にひそむ深い虚無性と、超越的な人格神との対比の間にあつて、人間本来の実存を回復しようとする実存哲学と認識に於て同じであり、スコウビイの状態はしたがつてキェルケゴールの死にいたる病 *Sydommen* *Til Døden* にあるとも、サルトルの絶望 *désespoir* の底にあるとも言えよう。

キェルケゴールに於ては、個人は個人自身であると共に人類であり、個々人は全人類を代表するものとして罪を背負つて神の前に立つている。即ち「実存とは神の御前に立つものである。これが根元的事実である」と言う事と、「人間的実存の本質の規定とは人間は個体であり同時に全人類である」と言う事である。つまり、人間の不安―恐怖の本質が人間自

体が無であり、無の深淵にのぞんでいると言う事よりも、不安を感じない事のために没落したり、不安の中に眩暈して没落したりする事なく、不安を正しく感じる事によつて不安の根元によれ、罪を背負つて神の前にある不安として救済に導く動機たらしめようと言うのである。

サルトルは又、人間の実存は本質に先立つものと規定した即ち技術による生産品と異り、人間の存在にはこれに先行すべき本質はない。本来無であり、無から存在し来つて立ち現れた (Existence) 人間は、神に思惟される事によつて創造されたのではなく、彼が自らを作りだしたものであると考へる。その故に人間は自らを計画し自らの存在を全人類としてえらびとると言う「責任」に主体性をおいている。したがつてサルトルの場合、不安はこの全体的責任からくる不安であり、絶望はこの実存である行動の中にあるわけである。

この二つの立場は、一は原罪の前提である不安を救済の媒体たらしめると言う不安の辯証法であり、一は行動の倫理による責任概念を説くのであるが、神を否定するにせよ肯定するにせよ、人間の实存への認識として、又これを回復しようとする方法論に於て、甚だ近い所に相接してゐるようである。グリーンの場合、警官スコウビーの实存は神と虚無との間にはさまれた論理的矛盾の恐怖であつたが同時にまたその恐怖が神を求めてやまぬと言う希望が示唆され、論理のギャップをこえる超越的な、たとえば煩惱即菩提と言つたような形

の神の存在が暗示されている。次作「愛の終り」に於ては、異常な situation の中に魂の遍歴を求めると言う従来の手法を捨てて、より日常的なモラルの問題を取上げる一方、神の問題を更に前面に押し出して、登場人物の中心的存在に「神」をおいて、救いの哲学を掘下けている。(未完)

「主流」前号(第十六号) 目次

感情の表現様式……………	榎垣実
Ballad Themes の一類型	
——Bride Stealing についで——	見玉実用
キーツの詩に於けるギリシヤ的要素……………	阿倍嘉子
厨川白村博士の横顔……………	衣笠梅二郎
青年期のホイットマン……………	木口敏郎
ホイットマンと宗教……………	猪飼邦全
——「草の葉」を中心として——	
カワード序説……………	権藤芳一
——「キヤジュアルケード」の諸問題……………	

書評

V. K. Whitaker:
The Religious Basis of Spenser's Thought

斎藤勇